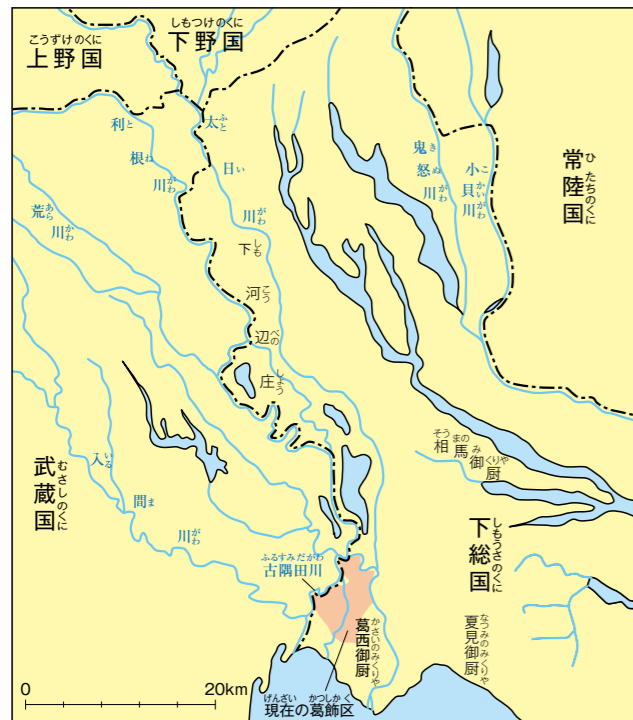


2 中世の葛飾

1 葛飾郡から葛西へ

◆新たな地域編成と葛西地域

10世紀後半になると、任期が終わっても現地にとどまった国司の子孫たちや有力な農民の中に、国府から税負担を免除され、一定の領域を開発する者が現れ、荘園が次々と成立した。荘園の開発者の中には、国司からの税負担などを逃れるため、土地を都の有力な貴族や寺社に寄進する者も現れた。このような荘園を寄進地系荘園と呼び、寄進者は寄進先に年貢を納めることで土地の支配が認められ、国の立ち入りを認めない特権を得る



▲中世の下総国葛西御厨周辺

葛西地域は現在の東京都葛飾・江戸川・墨田・江東区にあたり、関東の諸河川が海へ注ぐ臨海部に位置していることがわかる。

①三重県伊勢市に所在する神社。天照大御神を祀る皇大神宮の内宮、豊受大御神を祀る豊受大神宮の外宮からなる。

こともあった。

下総国内でも多くの荘園が成立し、国司が支配する公領と荘園に分かれた。葛飾郡内にも様々な荘園が成立したが、葛飾区域は伊勢神宮^①に寄進されて葛西御厨と呼ばれるようになった。御厨とは、本来天皇の食膳に出される魚介類などを調達するための所領であったが、平安時代末頃からは伊勢神宮で神に供えるための食物を調達する所領を意味するようになり、実質的には伊勢神宮の荘園のような存在であった。なお、葛西という地名は、太日川（現江戸川）を境にして、葛飾郡南部の東側を葛東、西側を葛西と呼んだことに始まるものである。

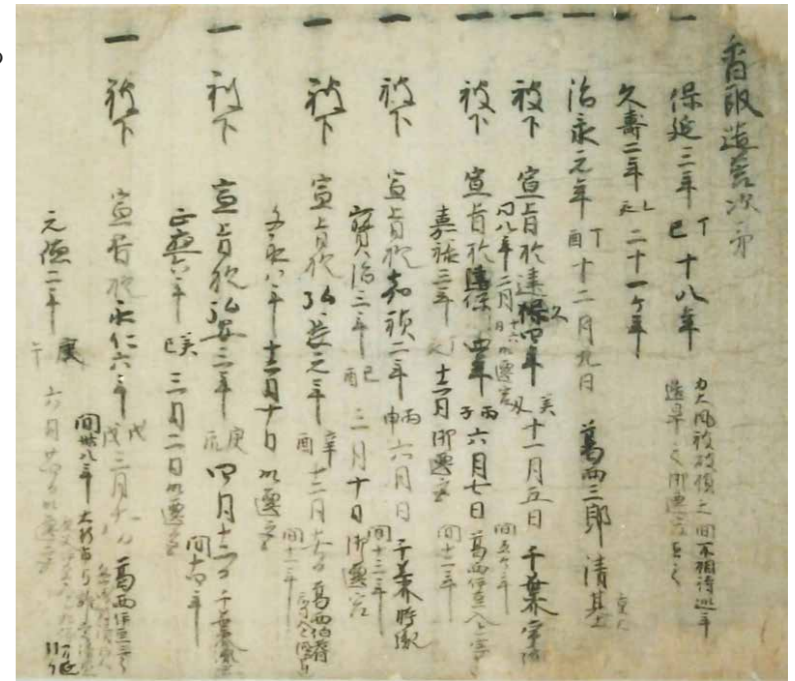
◆葛西御厨の成立時期と葛西氏

葛西御厨の成立時期については、いくつかの説があって正確なことはわかっていない。この地に葛西御厨が成立していたことを示す最も古い史料は、平安時代末期の永万元年（1165）年の「占部安光文書紛失状写」（『鎬矢伊勢宮方記』）であるが、この史料はその信憑性が疑わしいことから、葛西御厨の成立を平安時代末期にまでさかのぼらせることはできない。

葛西御厨の成立時期を考えるうえで重要なのは、葛西地域に進出した秩父平氏の流れを

▶「香取社造営次第」（香取神宮文書）

保延3（1137）年から元徳2（1330）年までの造営の様子を記している。

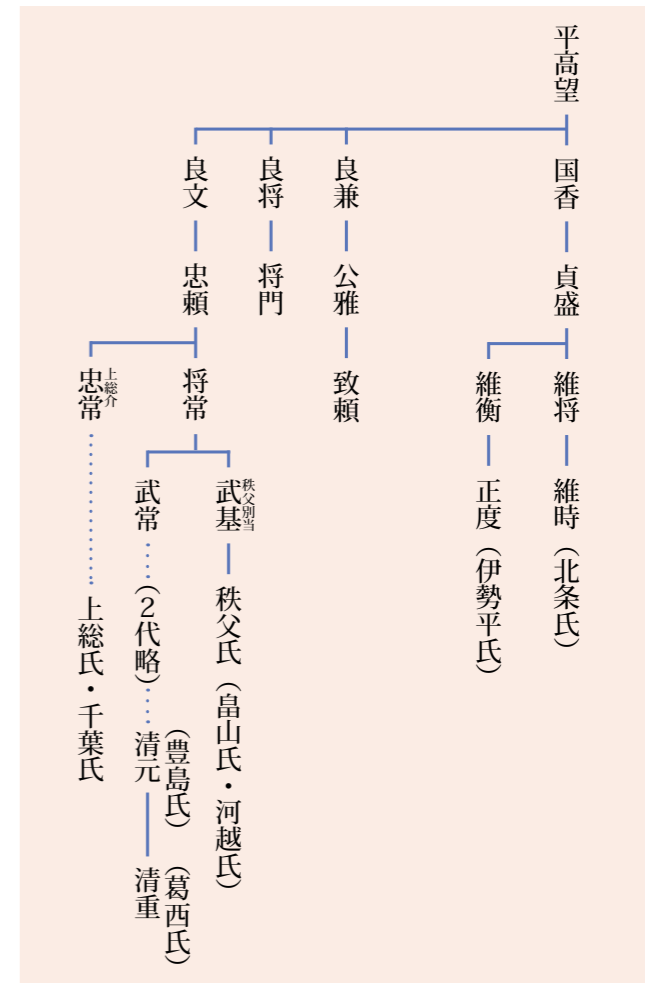


汲む武士の豊島清元と、その子の葛西清重をはじめとした葛西氏の動向である。

豊島清元と葛西地域との関係が史料上確認できるのは、文永8（1271）年の「香取社造営所役注文案」である。この史料には、清元が治承元（1177）年の香取社（香取神宮：千葉県香取市）遷宮^②にともない、正神

殿雑掌^③を務めていたことが記されている。香取社遷宮の社殿造営は、「香取社造営次第」によると、これ以降は千葉氏と清元の子孫である葛西氏が交代で行った。下総国の千葉荘や相馬御厨に権益を持っていた千葉氏は、葛東地域に成立した夏見御厨などにも勢力を伸ばしていたとされる。つまり、治承元（1177）年以降は葛西地域に勢力を持つ葛西氏と、葛東地域に勢力を広げていた千葉氏によって、香取社遷宮の神宮造営が行われていたことになる。少なくとも、香取社遷宮の神宮造営に関する史料から、清元が下総国一宮^④である香取社の造営に関わることができる有力者としての地位を確立していたことがわかる。

武蔵国豊島郡東部を本拠地とする豊島氏が下総国葛西地域に進出した背景には、秩父平氏の一族による東京低地の開発が進む中

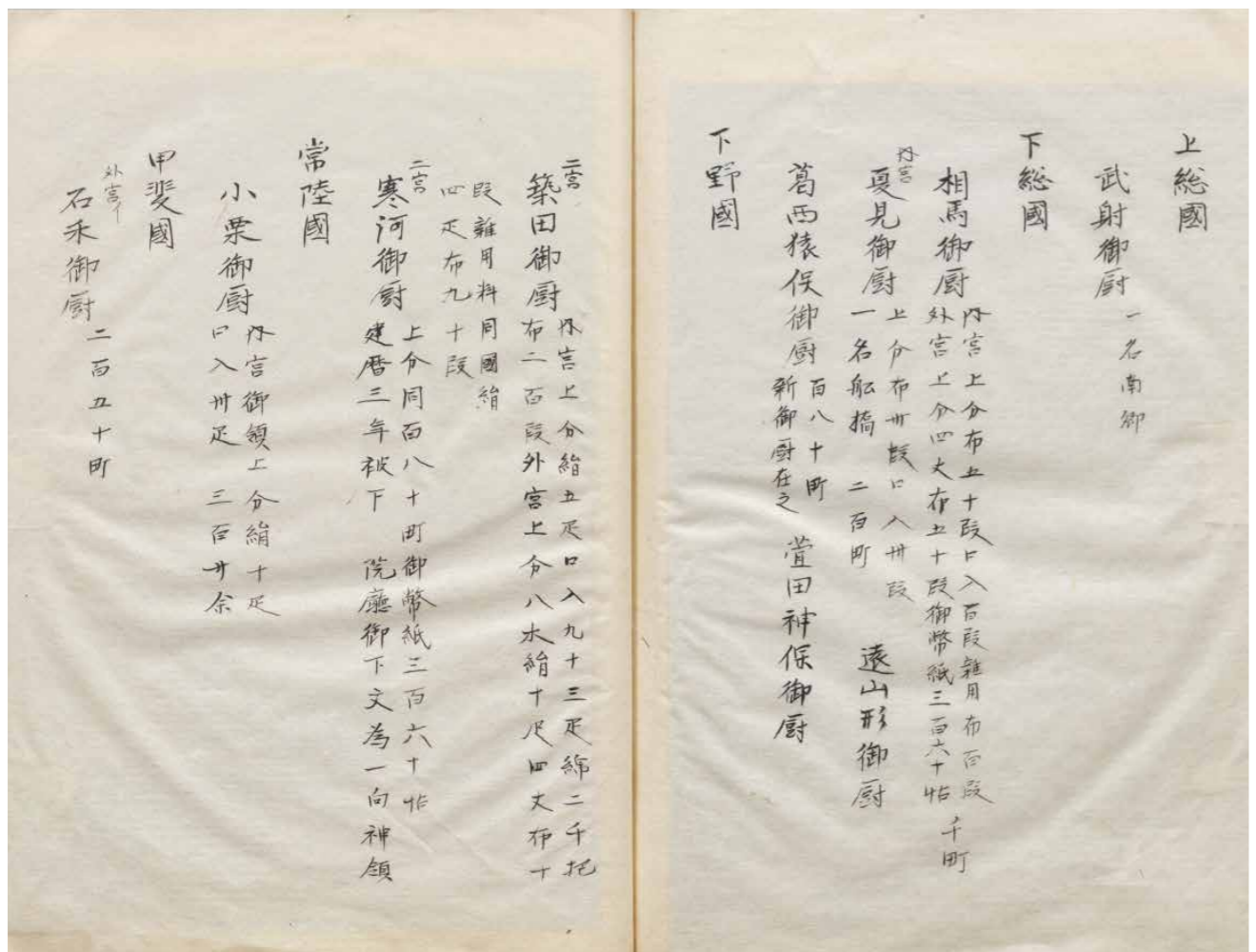


▲桓武平氏と豊島氏・葛西氏の関係を示す系図

①神社の本殿を新たに造営し、新しい本殿に御神体を移すことで、香取社も20年に1度、遷宮に伴う社殿の造り替えと、神宝調度品類の新調を行うことになっていた。

②寺社造営の負担を負うものを「雑掌」と呼び、葛西氏は正神殿を担当した。

③国の中で一番格式の高い神社のこと。



▲『神鳳鈔』(正徳3〔1713〕年写)
 下総国の箇所には、相馬御厨・夏見御厨・葛西猿俣御厨・遠山形御厨・萱田神保御厨の名が記されており、葛西猿俣御厨には「新御厨在之」との注が付されている。

で、葛西地域の対岸に勢力を持っていた豊島氏が新たな所領を求め、隣接する葛西地域の開発を進めたと推測されるが、詳しい事情は明らかでない。しかし、治承元(1177)年の香取社遷宮にともなう正神殿の造営に、葛西地域の年貢を充てていることから、治承元(1177)年以前に豊島清元が葛西地域に進出し、権益を持っていたと考えられる。

その後、鎌倉幕府が編さんした歴史書である『吾妻鏡』①の治承4(1180)年9月3日条に葛西清重が登場することから、治承元

(1177)年から治承4(1180)年までの間に、清重が父の豊島清元から葛西地域を継承し、葛西を名字として葛西氏を名乗り、豊島氏から分かれた。ここに、清重を初代として葛西氏が誕生する。なお、葛西氏の代々の当主は、初代の三郎清重が豊島清元の三男であったことから三郎と名乗っていた。

『吾妻鏡』の寿永元(1182)年には、葛西清重が伊勢神宮へ献上する馬の調達を命じられており、この時までに葛西地域と伊勢神宮との間に何らかの関係があったとすると、

葛西御厨の成立を源頼朝の挙兵の頃とし、清重が葛西地域の支配をより強力にするため、所領の葛西地域を伊勢神宮に寄進したとみることもできる。

鎌倉時代初期の建久3(1192)年に、各国に所在する伊勢神宮の御厨の名を書きあげたとみられる「伊勢大神宮神領注文」に葛西御厨の名前は見えないが、建久4(1193)年の『神鳳鈔』①には葛西御厨の名前が見られるので、この頃までに葛西御厨は成立していたと考えられる。

◆葛西御厨の構造

葛西御厨は、『神鳳鈔』に「葛西猿俣御厨」と記されていることから、初めは葛西地域の北部に位置する猿俣(葛飾区水元)周辺が御厨として開発され、その後、葛西地域の開発が進行するにしたがって御厨が拡大されたものと考えられる。また、「占部安光文書紛失状写」などによると、御厨の内部には33郷があつて、それらの郷は上葛西と下葛西に分かれていた。葛飾区域にあたる地域は、猿俣や小鮎が属していた上葛西であったと考えられる。

応永5(1398)年の「葛西御厨田数注文写」(『鐮矢伊勢宮方記』)に記載されている郷村の分布を見ると、38の郷村が存在したことが確認できる。また、この史料からは猿俣・小鮎・金町・飯塚の4郷が香取社の宝殿を造営するための年貢米を負担していたことがわかる。

◆葛西御厨の伝領と衰退

伊勢神宮において葛西御厨の管理を担当していたのは当初占部氏であったが、建治元(1275)年に伊勢神宮外宮の禰宜であった渡会氏にその職を譲り渡している。この後、葛西御厨は渡会氏の子孫によって代々管理されることになり、葛西御厨から伊勢神宮へ進上する物の催促や伊勢への輸送を、代官を現地に派遣するなどして行かせていた。

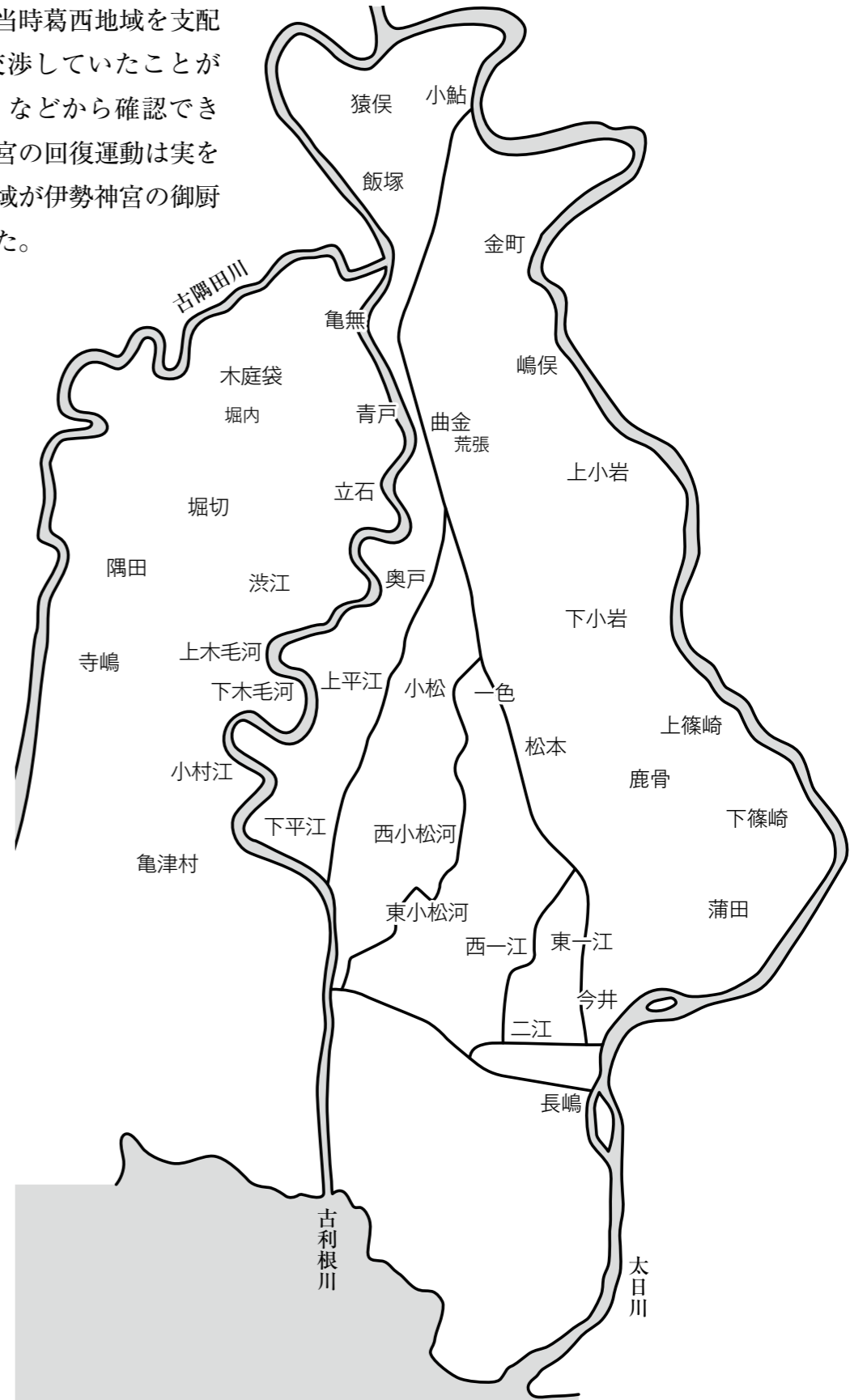
14世紀半ば以降、葛西氏と葛西御厨の関係を示す史料は確認されていない。室町時代に入ると、新たな勢力が葛西御厨内に進出し始める。至徳4(1387)年と明徳4(1393)年の2度にわたって、足利義満が、関東管領を務めた上杉憲方に対して葛西御厨内の所領を安堵している。この所領は兄の上杉憲春のものであったので、これ以前から上杉氏が葛西御厨に進出していたことがわかる。上杉氏の進出後も、伊勢神宮は上杉氏を通して葛西御厨に対して米の納入を催促していることから、室町時代になっても伊勢神宮が葛西地域の領主を通じて葛西御厨に関与することができたと考えられる。一方で上杉氏に訴え、上杉氏の命令によって米を納入させているので、自力での米の徴収が難しくなっていたことがわかる。

葛西御厨に関する史料は15世紀半ば以降確認されず、東国が戦乱に見舞われる享徳の乱の頃には、伊勢神宮の関与が弱まったと考えられる。また、天文22(1553)年の「外宮序宣写」(『鐮矢伊勢宮方記』)をみると、同年までの数年来、伊勢神宮の支配が及んでいなかったことがわかる。

①治承4(1180)年の源頼朝の挙兵から文永3(1266)年まで書き継がれ、全52巻(第45巻が欠)のうち、15巻までが頼朝を中心とした記述となっている。

①伊勢神宮(内宮・外宮)の所領を国別に書いたもので、建久4(1193)年のものを原形に書き加えられ、延文5(1360)年頃に成立したとされる。

このため、葛西御厨^{かさいのみくりや}の権益回復をめざす伊勢神宮が、当時葛西地域を支配していた北条氏と交渉していたことが『鐚矢伊勢宮方記』^{かぶらや いせみやがたき}などから確認できる。しかし、伊勢神宮の回復運動は実を結ばず、再び葛西地域が伊勢神宮の御厨となることはなかった。



▲葛西御厨の範囲
 応永5(1398)年の「葛西御厨田数注文写」に記載されている郷村名を略図に比定したもの。「上袋」「中曾称」については比定地が不明。「荒張」は「曲金」に、「堀内」は「木庭袋」に属していた。

一 嶋俣 七十五及 二ヶ郷分
 一 今井 卅二丁六及大 公田六町四及半
 一 東一江 八十丁 公田九十八及
 一 上小岩 十二丁及半 公田一丁六及
 一 上篠崎 二十二丁六及大 二ヶ村分
 一 下篠崎 卅五丁二及六十分 公田四丁七及
 一 寺嶋 八十丁 公田六丁
 一 洪江 二十四丁 公田四丁
 一 上木毛河 三十丁 公田六丁
 一 下木毛河 二十二丁 公田一丁四及
 一 松本 十六丁 公田九及小
 一 東小松河 五十丁 公田六十八及

下総國葛西御厨注文
 一 猿俣 十六町三段 三百分 公田二町九及大
 一 小瓢 九町一及六十分 公田一町五及大
 一 金町 十一町七段半 公田一町七及小
 一 飯塚 五町四段小 公田九及
 已上四ヶ郷田数四十二丁六及三百分
 香取社寶殿造管後而 荒張丁七及三分分
 一曲金 十八丁五段小 公田二丁九及半
 一 長嶋 二十七町 公田四十七及
 一 下小宿 卅三丁九及 公田三十六及
 一 麻骨 十一町九段 公田一町六及
 一 二江 四十三丁五及大 公田七丁五及
 合六ヶ郷田数百卅七丁九及六十分

一 上袋 十二丁 公田二丁半
 一 龜無 三十六丁 公田四丁三及
 一 補田 八十丁 公田六町
 一 西一江 卅丁五及 公田一丁八及
 一 中曾称 四丁八及 公田三及大
 一 下平江 六十五丁 公田四丁三及
 已上三十八郷村如定都合公田百三十二丁六十及
 應永五年八月日
 内外宮日食米時一及別三百五十宛取納耳
 一以上惣田数千百三十六町五段款
 又曲金内荒張二町七段三百分

一 一色 四十丁 公田四丁五及
 一 奥戸 卅七丁九及半歩 公田一丁六及
 一 小松 卅八丁一及半 西東公田二丁三及
 一 西小松河 二十五丁 公田三丁三及
 一 上平江 四十丁 公田四丁三及
 一 隅田 十二丁 公田二丁一及半
 一 堀切 十二丁 公田二丁一及半
 一 五石 卅一丁 公田一丁三及
 一 木庭袋^{堀内} 七十丁 公田八十五及内
 一 小村江 十五丁 公田八十五及内
 一 龜津村 十丁 合公田四丁
 合十五及堀内
 戸合二十半木
 連袋

▲「葛西御厨田数注文写」
 応永5(1398)年に伊勢神宮側によって制作された葛西御厨の郷村名と田数を書き上げた帳簿。葛西御厨内にあった集落の名前を知ることができる。

2 鎌倉時代の葛飾と葛西氏

◆源平合戦と葛西清重

『吾妻鏡』には、葛西清重は源頼朝の側近として仕え、鎌倉幕府の創設に尽力した御家人であったことがわかる。治承4(1180)年、頼朝は平氏打倒の兵を挙げたが、石橋山の合戦に敗れ、再起を期すため舟で安房国に渡り、東国の武士に参集を呼びかける。9月3日には、頼朝は小山朝政、豊島清元・葛西清重の親子、そして下河辺行平に参陣を求める書状を出している。注目すべ



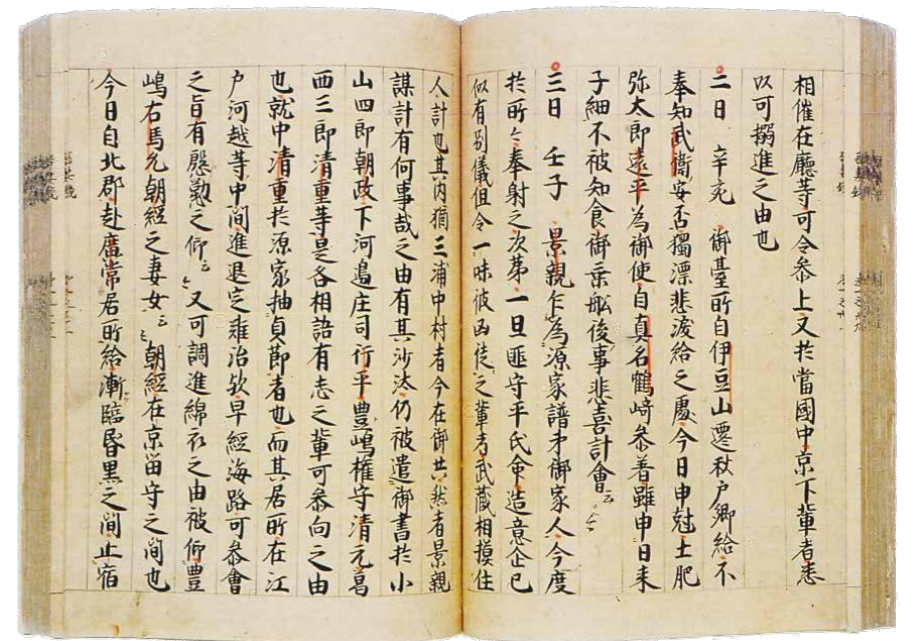
▲豊島清光坐像
豊島清元のこと。

きは、この日の『吾妻鏡』に「なかんずく清重は、源家において貞節を抽んづる者なり」とあることで、清重が源家に忠節を示した人物であることを評価している。そのうえで、清重がいた葛西地域が、平家方の江戸氏・河越氏に挟まれており、動きがとれないと思われるので、海路を使って参集せよと、頼朝は清重に対して特に気遣いをみせる指示をしている。このように、頼朝が早くから清重に対して参陣するよう求めた背景には、下総国と武蔵国との境である葛西地域に勢力を持っていた清重の実力を高く評価していたからであり、清重がこの頃葛西地域を拠点としていたことが推測できる。

源頼朝の下には次第に東国の武士が馳せ参じて軍勢が増え、安房国から下総国市川まで進軍するが、隅田川右岸地域に勢力を張っていた江戸重長が頼朝に従わないため、頼朝は容易に武蔵国へ入ることができない状況であった。そこで頼朝は、葛西清重に重長を討つように命じた。江戸氏は葛西氏と同族で

あったこともあり、清重は何とか重長を説得し、頼朝に味方させた。頼朝の軍勢は、10月2日には無事に武蔵国入りを果たし、川を渡った頼朝を豊島清元・葛西清重親子が出迎えている。

そして、治承4(1180)年10月6日に源頼朝は相模国鎌倉へ入った。鎌倉を本拠とした頼朝は、新たに御所を建てるとともに、頼朝と主従関係を結んだ武士である御家人を統制する侍所を設置した。頼朝が勢力を伸ばして



▲『吾妻鏡』(治承4〔1180〕年9月3日条)

左頁の5行目に「なかんずく清重は、源家において貞節を抽んづる者なり」という文章がみえる。



▶葛西清重夫妻肖像部分
室町時代の製作とされる。国語辞典『言海』の編纂者大槻文彦の旧蔵資料。長らく所在不明であったが、近年大槻家から発見された。



▲源頼朝坐像
元応元年(1319)年以前の製作とされる。源頼朝の容姿を表した現存する像としては最古のもの。



▲治承4(1180)年の源頼朝の進軍ルート図

- は国府
 - は源頼朝の挙兵に参加した武士
 - は初め源頼朝に敵対したが、後に味方した武士
 - 討たれた武士
 - は頼朝の進軍ルート
- 日付は『吾妻鏡』による

いくと、彼を自らの権益の庇護者と認識した関東地方の武士たちは競ってその従者となった。将軍と直接、主従関係を結んだ武士は御家人と呼ばれた。頼朝は御家人に対し、地頭に任命して先祖伝来の所領の支配を保障したり(本領安堵)、功績があった際に新たな領地を与えたりした(新恩給与)。これらの御恩を受けた御家人は従者として奉公を果たす義務があり、戦時には将軍のために命を賭して戦った。

その後も鎌倉を本拠地として平氏追討を指揮していた源頼朝は、養和元(1181)年に頼朝の寝所を警備する御家人に、武芸が達者な11名を選ぶが、葛西清重はその1人に選ばれている。清重は同年に鶴岡八幡宮の上棟祝いに馬を奉納する役目に任じられ、寿永元(1182)年1月には伊勢神宮に奉納する馬10疋のうち1疋を調達するように命じられている。また同年8月には、頼朝の妻であった北条政子の安産祈願を武蔵国の諸社に行う使節に任じられている。

葛西清重はその後も源頼朝の側に仕えながら関東地方制圧に参加し、恩賞として治承4(1180)年11月10日に武蔵国丸子庄(神奈川県川崎市)を与えられている。元暦元(1184)年には、平氏追討のため、源範頼を総大将とする軍勢とともに九州に渡った。元暦2(1185)年3月には、頼朝から北条義時や小山朝政らあわせて12人にねぎらいの書を賜っているが、その中に清重の名前も見える。こうして平氏追討を進めた頼朝は、ついに文治元(1185)年に壇の浦(山口県下関市の海域)で平氏を滅ぼす。

◆鎌倉幕府と葛西清重

葛西清重は父豊島清元とともに、文治5(1189)年の奥州藤原氏攻め①に、武蔵・上野の軍勢を率いて参加している。奥州藤原氏攻めで功績をあげた清重は、奥州の北上川沿いに広大な所領を与えられ、伊沢家景とともに戦後処理のためにつくられた奥州総奉行に任命され、奥州藤原氏滅亡後の奥州の治安維持にあたった。

建久元(1190)年11月から12月にかけて、源頼朝の全国平定を内外に示す上洛が行われることになると、葛西清重は上洛の道中の宿の手配を任された。そして、頼朝に従って上洛した清重は、主要な御家人10人のうちの1人として右兵衛尉の官職に任命された。この時に官職について御家人は、大変な栄誉であるとされ、清重の他にも三浦義村・和田義盛・小山朝政など鎌倉幕府の重鎮たちが官職を与えられている。清重が幕府内で重きをなしていたとともに、頼朝からの信頼も厚い人物であったことがわかる。

その後も清重は、頼朝が寺院や神社へ参詣する際の護衛としてたびたび随行するなど、鎌倉幕府の御家人として頼朝の側近くで仕えた。

源頼朝の死後も葛西清重は幕府に忠節を尽くしている。武蔵国の有力な御家人であった畠山重忠が謀反の疑いで討伐された際には、先陣として名を連ねている。承久元(1219)年1月、将軍の源実朝が暗殺された時の行列にも清重は従っていた。そして、将軍暗殺の翌日、北条政子と主だった御家人100人ほどがいっせいに出家するが、清重も



▲西光寺
葛西清重の館跡と伝わる。

この時に出家し定蓮と名乗った。

鎌倉幕府と朝廷が対立した承久の乱では、北条義時や大江広元・小山朝政などとともに「宿老」の1人として鎌倉に留まった。その後、元仁元(1224)年間7月、北条泰時が執権に就任した直後に発覚したクーデター計画の際には、北条政子のもとに呼び出され、幕府の安定に協力を求められている。これが『吾妻鏡』に葛西清重がみえる最後である。

清重の没年については諸説あるが、嘉禄3(1227)年の香取社(現香取神宮)正神殿造営に清重の名があるので、この頃までは生存が確認でき、この後間もない時期に亡くなったものと思われる。葛飾区四つ木の西光寺近くには、清重墓所と伝わる清重塚が存在する。

葛西清重は、源頼朝の平氏追討に大きな貢献をし、鎌倉幕府成立後も有力な御家人として幕府の政治に関わっていた。弘安年間(1278~1287)に無住によって著された『沙石集』①には、「芳心があつて弓箭の道にも優れた人物」として清重が登場して



▲葛西清重墓(東京都指定旧跡)
かつては清重塚とも呼ばれ、葛西清重の墓所と伝わる石塔が四つ木の西光寺近くの墓地にある。



▲普賢寺宝篋印塔(東京都指定有形文化財)
東堀切の普賢寺は、葛西清重が創建したと伝えられ、葛西氏ゆかりの宝篋印塔が境内に3基ある。鎌倉時代末期から室町時代前半のものである。

おり、鎌倉時代において、すでに武士の模範となる人物の1人としてその名を知られていたことがわかる。また、他の史料から裏付けることができないため伝説とみなされているが、『曾我物語』②の中にも、清重が馬術に巧みであったことが記されている。しかし、このような伝説が生じる背景には、清重が実際に馬術に優れていたからであるとみられ、武士としての性格の一端がうかがえる。

① 文治5(1189)年に源頼朝率いる鎌倉軍が、平泉を本拠とし奥州に君臨した藤原氏を攻め滅ぼした合戦。奥州藤原氏が頼朝の弟義経を平泉にかくまったことがきっかけとなっている。

① 鎌倉時代中期の仏教説話集。日本だけでなく中国やインドの話題など多岐にわたっている。

② 鎌倉時代に起きた曾我兄弟の仇討ちを題材にした軍記物語。



▲鎌倉の葛西ヶ谷
地名は葛西清重の屋敷があったことに由来するとされる。

葛西氏の当主は、清重以降、清親・時清・清経・宗清・清貞と継承された。源頼朝以来の有力御家人が執権の北条氏によって滅亡に追いやられるなか、葛西氏は北条氏とも良好な関係を築きながら命脈を保ち続け、鎌倉時代を御家人として生き抜いていった。

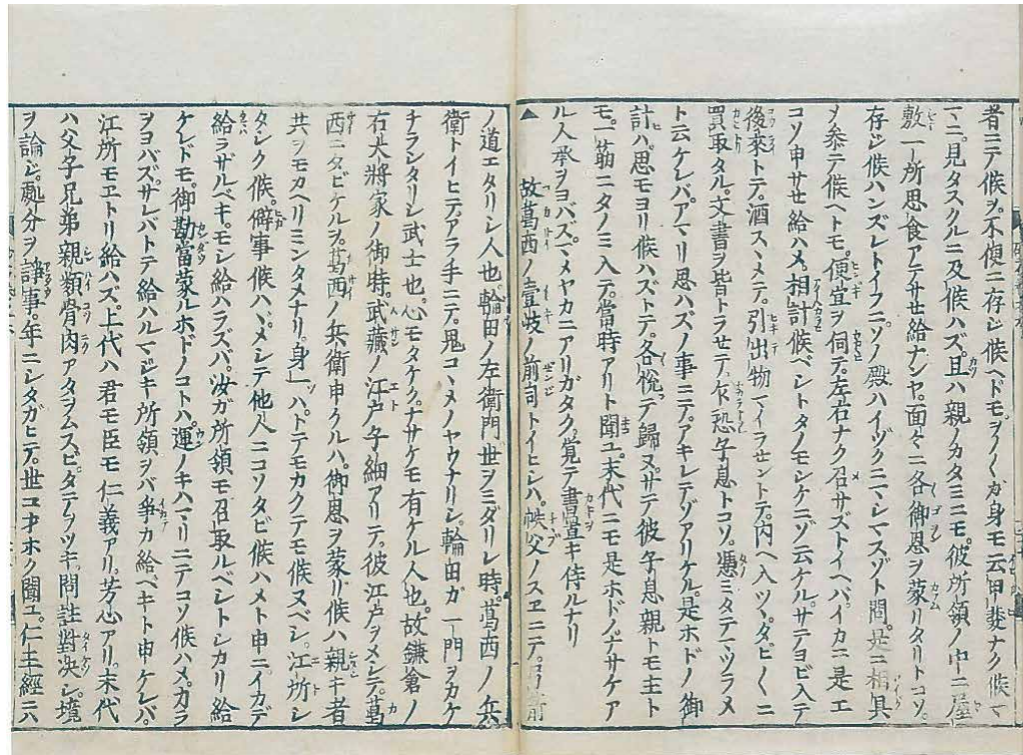
◆鎌倉御家人葛西氏の広がり と 葛飾

葛西清重は鎌倉幕府が成立する以前から葛飾区域を含む葛西地域に勢力を有しており、幕府成立後も源頼朝から葛西地域の領有を認められていた。また、葛西氏は頼朝が鎌倉に入って以降、葛西地域に加え、鎌倉の葛西ヶ谷にも屋敷を構えていたとされる。

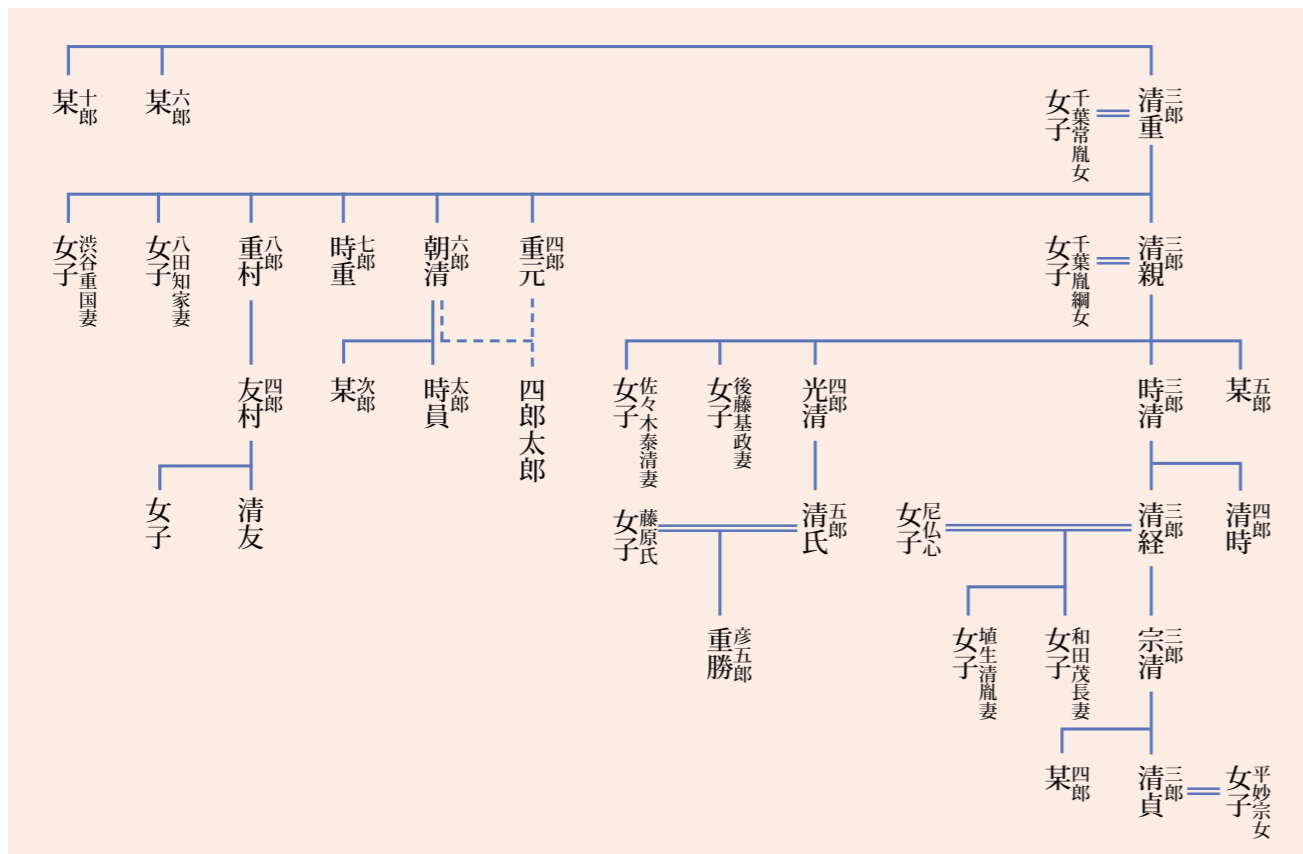
また、清重は葛西以外にも頼朝挙兵以後の数々の功績により、全国各地に所領を与えられた。現在確認されているのは、葛西地域に近い武蔵国丸子庄、奥州藤原氏攻めの功績によって与えられた陸奥国の磐井郡(岩手県一関市・平泉町ほか)や伊沢郡(岩手県金ヶ崎町ほか)、牡鹿郡(宮城県女川町・石巻市)などがあげられる。武蔵国丸子庄は東京湾の西側、多摩川の河口付近に位置し、利根川や太日川などが東京湾に流れ込む河口部の低地帯に位置する葛西地域と似たような環境にあったと考えられる。また、陸奥国に与えられた所領のうち、牡鹿郡は北上川の河口に位置し、他の陸奥国の所領と水運で結ばれていた。葛西氏は全国にある所領を、水運を使って経営していたとみられ、本拠地とされる葛西地域には全国各地から様々な物資が運び込まれ、また葛西地域から各地へ物資が運ばれていったと考えられる。

葛西氏は陸奥国などにある遠隔地の所領には、代官を派遣して経営にあたらせてい

た。こうした代官には、葛西地域出身の人物が任命されていた可能性がある。葛西清重から数えて5代目の当主である葛西宗清の代官であった二江入道承信は、陸奥国平泉の中尊寺との訴訟に登場し、下総国香取社(香取神宮)との連絡役を務めている。二江という名は葛西御厨内にみられる地名に由来するとみられることから、葛西地域の出身で、宗清に登用され代官に任命されていたと思われる。他にも葛西氏一族の代官として、葛西御厨内の地名で、現在の葛飾区内の地名でもある青戸を名乗る青戸二郎重茂の活動が史料より知られる。また、『吾妻鏡』安貞2(1228)年2月12日条によると、2代目当主葛西清親は、鎌倉の將軍家御所において行われた相撲大会に、芝俣平次三郎を召し出して將軍の御前で相撲をとらせている。この人物が芝俣を名字としているのは、現在の葛飾区柴又に関係していたからであると考えられる。葛西御厨や葛西氏の所領支配の仕組みについては不明な点が多いが、水上交通を利用して各地の所領を結び付けるとともに、本拠地である葛西地域の人材が代官として所領の経営などに関わっていたとみてよいだろう。



▲「芳心アル人ノ事」(『沙石集』巻6)
葛西清重のエピソードとして、源頼朝の味方につかない江戸重長の抹殺を命じたが、清重は同族であることから断った。抹殺しなければ所領を没収するとまで言ったが、それも致し方ないと答えた。清重の潔さに感心した頼朝は処罰しなかったということが書かれている。



▲葛西氏系図
葛西氏当主は三郎を名乗り、清重の子孫の名前のうち、朝清は源頼朝、清経は執権の北条経時、宗清は同じく時宗、清貞も同じく貞時から一字付与されたものと考えられる。

◆南北朝の動乱と葛西氏

鎌倉時代末期になると、各地で反幕府勢力が蜂起する。後醍醐天皇による2度にわたる倒幕計画に対して、鎌倉幕府は大勢の軍勢を派遣して鎮圧を図り、元弘元(1331)年に天皇は山城国の笠置山に逃走する。この派遣された軍勢の中に葛西氏の名前がみえることから、この頃までは幕府側として活動していたとみられる。

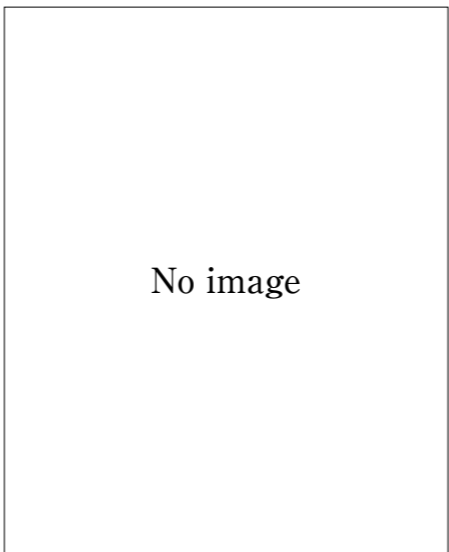
しかし、葛西氏は元弘3(1333)年に倒幕側の新田義貞の軍勢に加わり、分倍河原(東京都府中市)の戦いで幕府の軍勢を撃破し、鎌倉に攻め込んだ。そして、同年5月、北条高時らが鎌倉の東勝寺で自害し、鎌倉幕府は滅亡した。

この義貞の軍勢に加わった葛西氏は、おそらく葛西地域にいた葛西氏であったと考えられるが、この後の葛西氏の動向は各地の一族が独自の動きをみせるため、正確に把握することができない。建武元(1334)年には、葛

西氏が武蔵国の江戸氏などとともに、後醍醐天皇の建武新政府によって関東地方統治のために置かれた鎌倉将軍府に対して反乱を起こしている。しかし、一方で葛西氏の6代目当主とされる葛西清貞は、建武2(1335)年のものとみられる「後醍醐天皇宸筆事書案」に、奥州において清貞が後醍醐天皇より「無二之忠」と賞されていることから、南朝方として活動していたことがわかる。葛西氏の当主は、清貞の頃に葛西清重以来の本拠地である葛西地域を退去し、陸奥国へ本拠を移したと考えられているが、その詳細な時期はわかっていない。清貞は「香取社造営次第」によると、元徳2(1330)年に雑掌として香取社(香取神宮)の遷宮に関わっていることから、この頃までは葛西地域を拠点に活動していたとみられる。少なくとも南北朝の動乱が葛西地域を拠点としていた葛西氏に大きな影響を与えていたことは確かであろう。

建武2(1335)年には、北条高時の子である時行が鎌倉幕府再興のため鎌倉へ攻め入る大規模な反乱を起こした(中先代の乱)。この反乱に対して、京都にいた足利尊氏は鎌倉に下り鎮圧するが、尊氏の軍勢の中で葛西氏の家臣である末永氏が軍功をあげ、尊氏のそばに召されたとある。尊氏の軍勢に従っていた葛西氏がいたことがわかる。

この後、足利尊氏は建武政権に反旗をひるがえし、新田義貞を破って京都に入った。これに対して建武3(1336)



▲「後醍醐天皇宸筆事書案」(建武2〔1335〕年)
(白河結城家文書)

年には、後醍醐天皇より尊氏追討を命じられた北畠顕家が、陸奥国より葛西氏ら5万騎を率いて上洛し、新田義貞・楠木正成らと合流して尊氏を京都から九州に追い落とした。この時の戦いで葛西江刺三郎左衛門という人物が戦死しているが、これは陸奥国に移った葛西氏の一族とみられる。一方、延元2(1337)年に北畠顕家の軍勢が再び陸奥国から京都に向かうが、これを追撃する関東地方の足利方の軍勢に、江戸氏などとともに葛西氏の名前があげられている。この葛西氏は陸奥国へ移った葛西氏の当主ではなく、下総国葛西地域に残っていた葛西氏であったと考えられる。南北朝時代には、葛西氏の当主は陸奥国に移っていたが、一部の葛西氏は葛飾区域に残って活動していたとみられる。しかし、康永4(1345)年の「香取社造営諸役注文」に小鮎・猿俣の地頭として葛西氏の名が見えるのを最後に、葛西の地での葛西氏の活動を史料から確認することはできない。

葛西氏は、陸奥国へ移った後、日本海側へも展開している。円覚寺(青森県深浦町)にある永正3(1506)年の棟札に「葛西木庭

袋伊予守頼清」とあり、葛西木庭袋氏の存在が確認できる。また16世紀前半の若狭国遠敷郡小浜(福井県小浜市)や、16世紀後半には豊後国を中心に領国を拡大した大友氏の家中にも「葛西」を名字とする一族の活動が確認できるなど、本宗家以外の葛西氏の足跡が各地に残されている。

陸奥国に移った葛西氏は、東北地方にあって戦国大名として君臨したが、天正18(1590)年の豊臣秀吉の奥州仕置によって清重以来の名族葛西氏は滅亡してしまう。



▲円覚寺薬師堂棟札(永正3〔1506〕年)
「大旦那葛西木庭袋伊予守頼清」とあり、別の永正2(1505)年銘の棟札にも「伊予守頼清」と同一人物の名が記されている。これらの棟札は葛西の地名を冠する木庭袋葛西氏の津軽での活動を示す貴重な史料である。



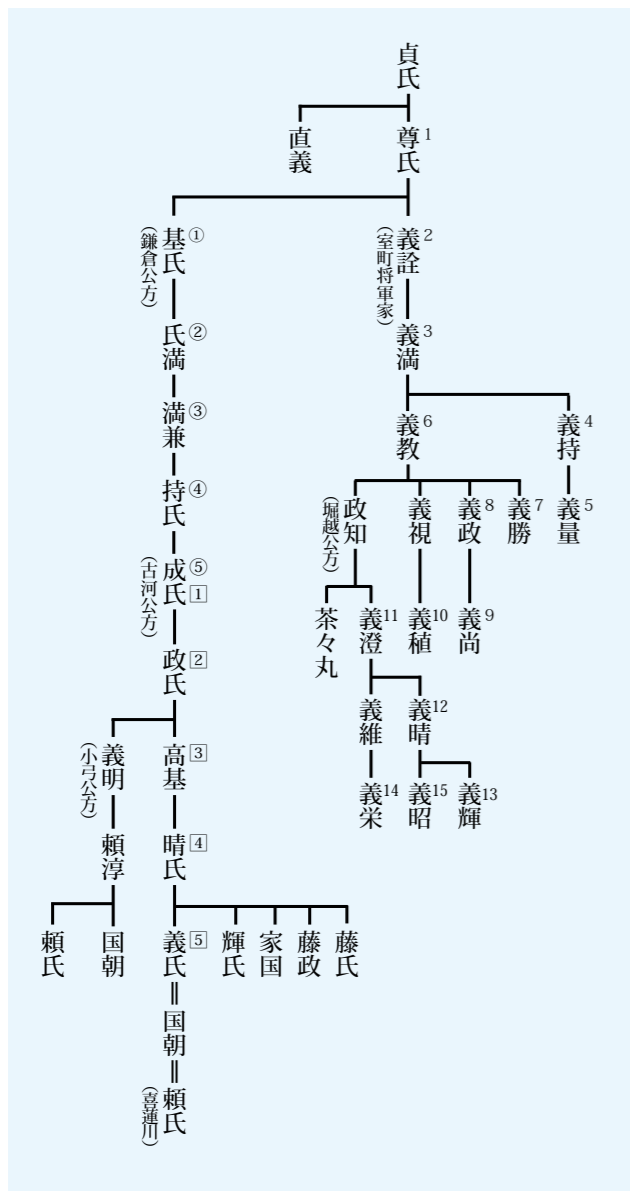
▲『太平記』(巻十)
『太平記』は応安年間(1368〜1375)に成立したとされる、南北朝時代の動乱を描いた軍記物語。元弘3(1333)年の武蔵国分倍河原合戦で、葛西氏らが幕府を見限り、新田義貞に属して鎌倉を攻め落としたことが書かれている。

3 関東の戦乱と葛西城

◆室町幕府の成立と関東の統治

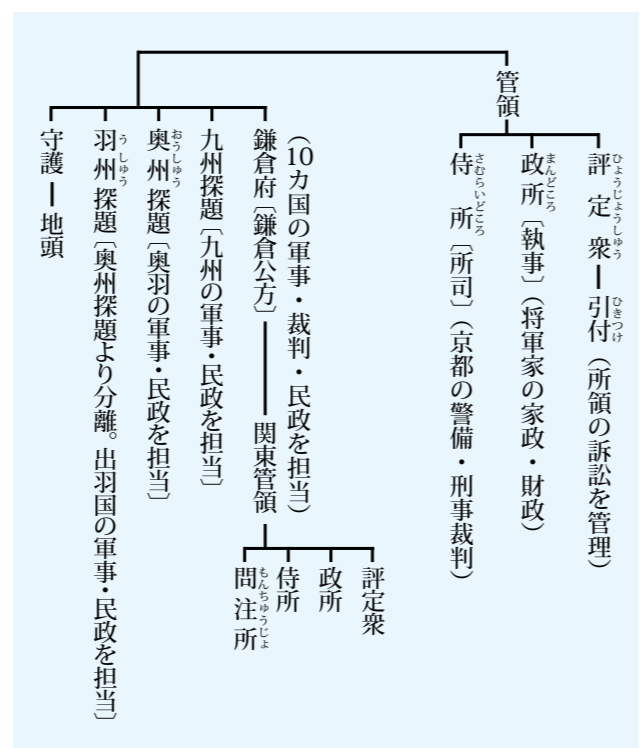
暦応元(1338)年、足利尊氏は北朝の光明天皇から征夷大將軍に任じられ、京都に室町幕府を開いた。室町幕府も鎌倉幕府と同様に、諸国に守護・地頭を設置し、地方支配の安定に努めた。さらに、関東や奥州・

九州の各地方には統治機関を置いて支配する体制をとった。関東には鎌倉府が置かれ、尊氏の子である足利基氏が首長である鎌倉公方に就いた。鎌倉公方の地位はその後、基氏の子孫によって世襲されていった。また、鎌倉公方を補佐する関東管領を設け、上杉氏が代々世襲した。鎌倉府の組織は基本的に室町幕府と同様で、その支配下にあったのは10カ国^①に及び、それらの国の守護は鎌倉に邸宅を持ち、鎌倉府に出仕していた。さらに、鎌倉府は他の地域の統治機関と違い、鎌倉府管内の裁判権や軍事権を持っていたことから、大きな権限があった。また、鎌倉公方は室町幕府の將軍に対して次第に対抗意識を持ち、幕府と対立するようになった。



▲足利氏系図

① 関東管領の任命権は室町幕府が持っていた。



▲室町幕府の機構

② 鎌倉府が管轄していたのは関東8国(相模・武蔵・安房・上総・下総・常陸・上野・下野)と伊豆・甲斐が基本であった。後には陸奥・出羽や信濃を一時的に支配下においていたこともあった。

◆鎌倉公方と室町幕府

鎌倉公方の2代目である足利氏満は、康暦元(1379)年に上洛して3代將軍足利義満に取って代わろうとしたが、関東管領の上杉憲春に死をもって諫められたことで取り止めた。3代目の足利満兼も京都への出兵を計画し、後にとりやめるなど、室町時代初期から鎌倉公方と將軍の対立はあったが、いずれも未遂に終わった。

こうした鎌倉公方の動向に対し、関東管領の上杉氏は幕府との融和に努めたが、鎌倉公方は上杉氏の対応に不満を持つようになり、両者は対立を深めていく。応永23(1416)年に前関東管領の上杉禅秀(氏憲)が、鎌倉公方の足利持氏と対立し反乱を起こしたが、持氏は幕府の援助を受けてこれを鎮圧した(上杉禅秀の乱)。乱後、持氏は自身に反対する勢力を討伐し、次第に幕府から自立した行動をとるようになる。

6代將軍に足利義教が就任すると、足利持氏と幕府の関係はさらに悪化した。持氏は幕府との協調を重視する関東管領の上杉憲実とも対立し、ついに永享10(1438)年、持氏が憲実を鎌倉から追放し、憲実は幕府に助けを求めた。幕府は追討軍を送って持氏を破り、持氏は自害した(永享の乱)。

その後、上杉憲実も引退し、鎌倉府では鎌倉公方と関東管領がともに不在となる。足利義教の死後、幕府は関東の安定を図るため、文安4(1447)年に足利持氏の子の足利成氏の鎌倉公方就任を許した。なお、それにさきがけて関東管領には上杉憲忠が就任した。

① 上杉憲頭を祖とし、事実上の上杉家の宗家で、関東管領職を継承した。鎌倉の山内(鎌倉市山之内)に館を置いたため、このように呼ばれた。

だが、足利成氏が鎌倉公方に就任しても、鎌倉公方と関東管領の対立は解消されず、幕府と鎌倉公方の関係も悪化したままであった。こうしたなか、享徳3(1454)年、成氏が関東管領上杉憲忠を暗殺したことをきっかけに、関東における戦国時代の幕開けとなった享徳の乱が勃発した。これによって関東は、幕府の支援を受ける山内上杉・扇谷上杉の両上杉方と鎌倉公方の足利成氏方に分かれ、関東の武士たちを巻き込んで全面的な軍事衝突が繰り広げられることとなった。下総でも、守護であった千葉氏が、上杉方を支持する当主側と、成氏方を支持する一族の側に分かれて争う事態が起こるなど、各地で当主と一族、当主と家臣が上杉方と成氏方に分かれて対立することもあった。

足利成氏は戦いの中で鎌倉を占拠されたため、鎌倉に戻れなくなり、本拠地を味方が多い古河(茨城県)に移したことから、これ以降「古河公方」と称された。なお、成氏は幕府に対抗して、幕府主導で改元された康正の元号を使わず、享徳の元号を使い続けた。

この乱で、関東は東京湾に注いでいた古利根川を挟んで、西側に幕府方・上杉方の勢力、東側に古河公方の勢力が対峙し、極度の軍事的な緊張状態に陥って事実上東西に分断されることとなった。葛飾区域を含む葛西地域は、太日川(現江戸川)を挟んで西側の幕府方の山内上杉氏の勢力と、東側の成氏の勢力とがにらみ合う場所となり、その最前線に葛西城があった。

② 上杉重頼を祖とする。鎌倉の扇谷(鎌倉市扇谷)に館を置いたため、このように呼ばれた。戦国時代には河越城に本拠を移し、武蔵国を拠点にした大名。



▲享徳の乱時の関東の勢力図
太日川(現江戸川)を挟んで室町幕府・関東管領上杉方と古河公方足利成氏方が対峙する状況がわかる。

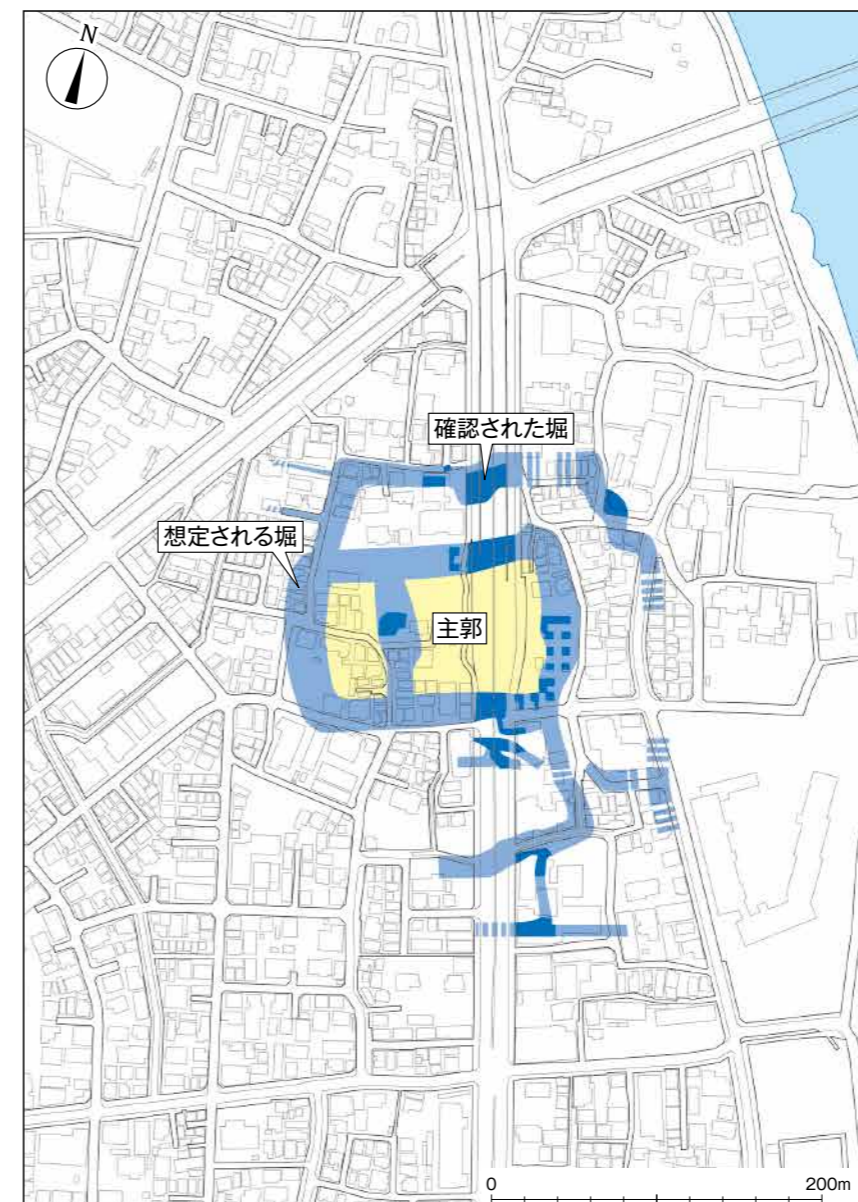
◇関東の戦乱と葛西城

葛西城は、上杉方によって築かれた葛西地域における重要な軍事拠点として存在した。葛西城の築城年代は不明だが、寛正2(1461)年に足利成氏が葛西城を攻めたとする史料があることや、これまでの発掘調査の成果から、享徳の乱の頃に現在の葛飾区青戸の地に築城されていたと考えられる。

上杉方が隅田川右岸に築いた江戸城(千代田区)に、扇谷上杉氏の家臣である太田



▲葛西城主郭堀の発掘調査



▲葛西城の想定位置図
発掘調査成果から想定した葛西城の輪郭。南北には大きな道路が環状7号線、東西が国道6号線。東にある川は、中川である。

道灌が入り、葛西城は山内上杉氏の家臣である大石石見守が守備し、太日川(現江戸川)左岸に展開する古河公方の勢力の動きを牽制していた。

長禄2(1458)年、8代將軍足利義政は足利成氏に対抗するため、兄の足利政知を鎌倉公方として派遣した。しかし、政知は関東の武士の支持を得ることができなかったため鎌倉に入れず、伊豆国堀越(静岡県伊豆の国市)に留まり、堀越公方と称された。

文明9(1477)年に、山内上杉氏の家臣の長尾景春が、古河公方と対立していた山内上杉顕定と扇谷上杉定正を急襲した(長尾景春の乱)。これに危機感を抱いた顕定は、翌年に成氏と和睦した。その後、文明14(1482)年には、幕府と古河公方との間で和睦が成立し(都鄙合体)、武力衝突は回避され、関東を足利成氏(古河公方)

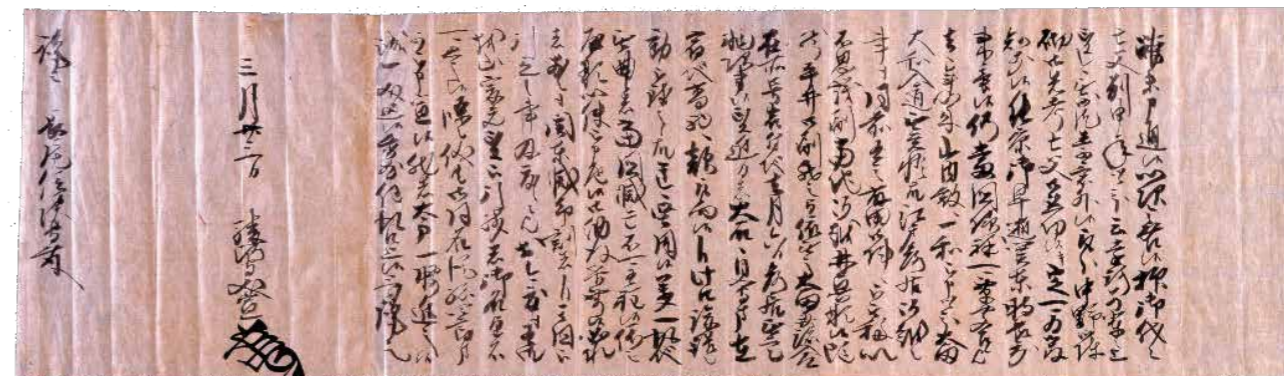
が、伊豆を足利政知(堀越公方)が治めることになった。

◆北条氏と葛西城の攻防

享徳の乱は一応の終結をみたものの、関東では武士同士の所領争いなどが相次ぎ、各地でしばしば武力衝突が発生した。その頃、伊豆国では伊勢宗瑞(後に北条早雲と呼ばれる)が、明応4(1495)年に堀越公方を打倒し、伊豆国を制圧した。さらに、宗瑞は関東の騒乱の隙をついて、扇谷上杉氏の

領国であった相模国に侵攻し、国内の勢力を次々と制圧していった。

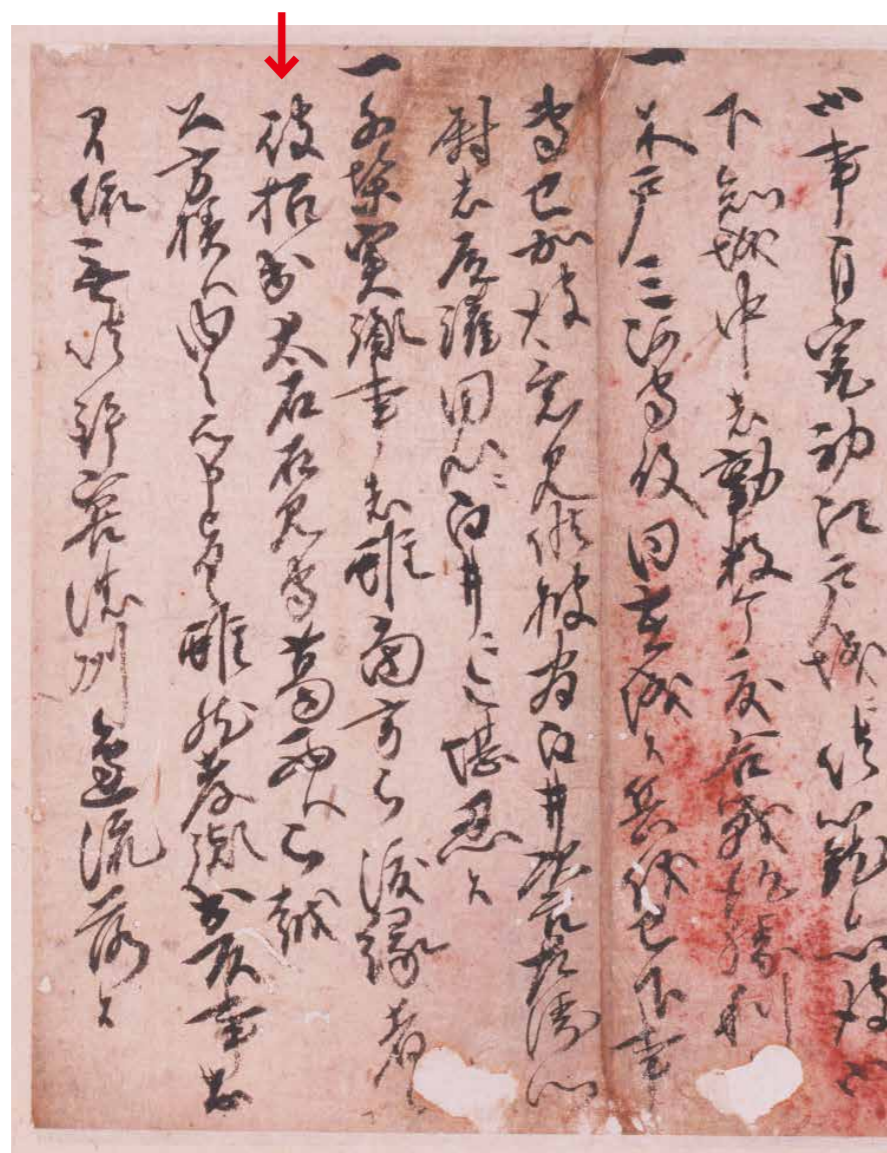
宗瑞の跡を継いだ氏綱は、関東の支配の正当性を示すため、伊勢氏から鎌倉幕府の執権であった北条氏に改姓し、北条氏綱と名乗った。北条氏は、大永4(1524)年に扇谷上杉氏の南武蔵の拠点を攻略したが、この時に江戸城も落城し北条方となった。これによって葛西城は上杉方の最前線となった。大永5(1525)年に扇谷上杉氏の家臣三戸義宣が越後の長尾為景に宛てた「三戸義宣書状」



▲「三戸義宣書状」(大永5〔1525〕年3月23日)(上杉家文書)



▲北条九代記 鴻台合戦
国府台合戦を描いた錦絵で、嘉永5(1852)年に歌川芳虎によって描かれた。中央の騎馬武者が小弓公方足利義明。



▲「太田道灌状」
長尾景春の乱の時に景春に味方した千葉実胤が、大石石見守に招かれて葛西に移ったことが書かれている。石見守が葛西城に居城していたことがわかる。

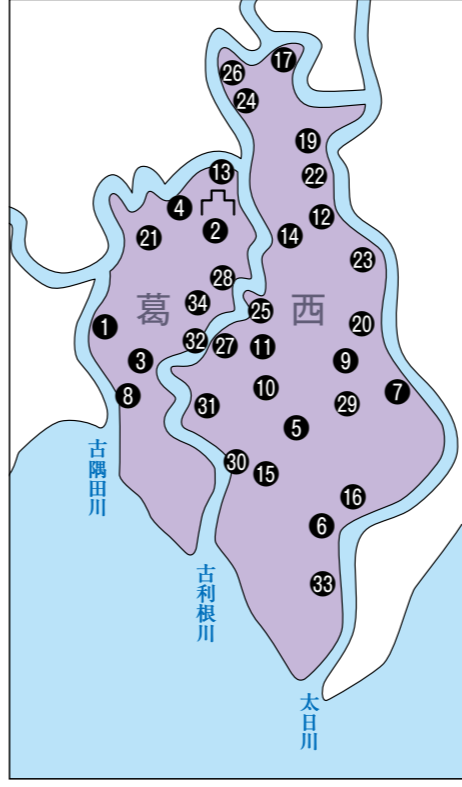
から当時の緊迫した状況がうかがえる。書状には、北条氏に上杉方の江戸城・岩付城が攻略され、もし葛西城が落ちれば「当国滅亡」は目前と記されている。葛西城は、関東諸河川の河口部に位置する南関東最南端に唯一残る上杉方の城であり、葛西城が奪われると、海と内陸部とを連絡する要衝を失うことになるという危機感が読み取れる。

この後、葛西城は10年以上も北条氏の攻撃に耐えて上杉方としてもちこたえたが、天文7(1538)年2月に氏綱に奪われている。

以後、葛西城は北条氏の軍事拠点となる。北条氏綱は関東での勢力拡大を進めるため、古河公方の足利晴氏と連携した。晴氏も、敵対する小弓公方・足利義明への対応のために北条氏と結び、小弓公方の討伐を氏綱に依頼した。天文7(1538)年10月に下総国の国府台で氏綱は、義明と彼を支持する安房国の里見氏と戦い、義明が敗死し北条氏が勝利した(第1次国府台合戦)。隣接する下総方面の敵対勢力が後退することで、北条氏は葛西地域で安定した支配を行うことができた。

①古河公方足利政氏の次男である足利義明が、父や兄の高基と対立し、下総国小弓城(現在の千葉市中央区・緑区)を拠点として勢力を張ったことに由来する。

1 寺島	60貫文	21 堀切	45貫文
2 青戸	二〇〇貫二十五文	22 金町(半分領主知申)	三四貫八〇〇文
3 小村井	六五貫文	23 会田中務丞(信清)	一二〇貫二五〇文
4 千葉袋	六〇貫文	24 小岩	九三貫四〇〇文
5 東小松川	四五貫文	25 飯塚	五一貫二五〇文
6 二之江	一八貫文	26 奥戸	四九貫文
7 篠崎(上下)	一一三貫八四四文	27 千葉殿	四五貫文
8 葛西川	二〇貫文	28 上平井	三五貫文
9 鹿骨	二七貫七五〇文	29 堀内	四五貫文
10 小松(上下)	七〇貫九五三三文	30 東一之江	三二貫文
11 一色	四七貫文	31 島津孫四郎	四五貫文
12 柴俣	三五貫文	32 大田大膳亮	一五貫三〇〇文
13 亀梨	一一三貫八二四四文	33 西小松川	一〇〇貫文
14 曲金	一一五貫文	34 朝倉平次郎	五六貫三五〇文
15 西一之江	二五貫七〇〇文	35 木毛川	二貫文
16 金(今井)(上下)	一七貫五〇〇文	36 太田新六郎(康資)	二貫文
17 小合	四五貫文	37 長島高城	三九貫五〇〇文
18 遠山弥九郎	葛西在城(青戸)	38 山中内匠助(頼次)	三九貫五〇〇文
19 荻野	一七貫文		
20 森弥三郎	二〇貫文		
21 大胡(牛込勝行)	六〇貫文		
22 豹徳軒(上田)	四五貫文		



▲「小田原衆所領役帳」にみる江戸衆知行分布図
北条氏が家臣に課した軍役などを知行地・知行高で記録したもの。江戸城代の遠山丹波守(綱景)は、葛西城がある青戸をはじめ、葛西地域に多くの所領を持っていたことがわかる。

は、北条氏と義氏の接点が江戸城を守る遠山氏を介したものであったため、当時遠山氏の支配が最も及んでいた葛西地域にあった葛西城が選ばれたと考えられる。

永禄元(1558)年4月4日、義氏は鎌倉社参のために、葛西城を出発し、10日に鎌倉の鶴岡八幡宮へ参詣を行い、15日に北条氏の本拠小田原城へ入った。その後は、葛西城に戻ることはなく、関宿城(千葉県野田市)へと移った。義氏が葛西城ではなく関宿城に移った背景には北条氏の意向があったとみられ、公方である義氏を通じて、関東内陸部の水運の拠点である関宿を支配し、周辺にある公方領国や関東の河川交通を掌握する目的があったと考えられている。

永禄2(1559)年に作成された「小田原衆所領役帳」によれば、北条氏家臣で江

戸衆の筆頭である遠山丹波守(綱景)をはじめ、江戸衆が葛西地域に多くの所領を持っていたことがわかる。

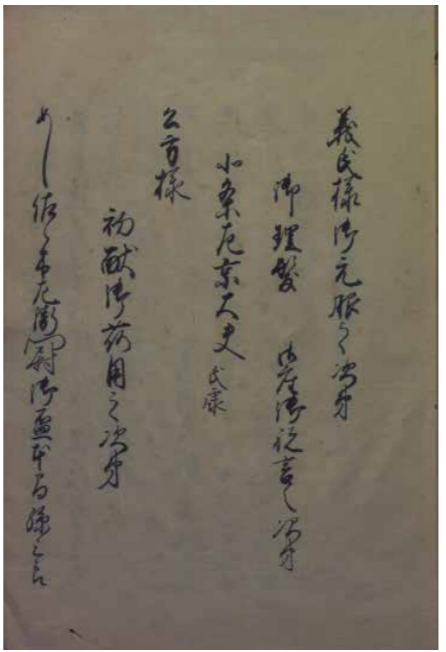
◆長尾景虎の関東進攻と葛西城

永禄3(1560)年に越後の長尾景虎(後の上杉謙信)が関東に進攻した。景虎は反北条氏勢力を結集して、北条氏の本拠地である小田原城下に軍を進駐させた。景虎の進攻によって葛西城も落ち、葛西周辺は北条氏から反北条氏の勢力下へと移った。しかし、翌年景虎が越後へ退去すると、北条氏は反撃を開始し、永禄5(1562)年に葛西城は北条方の太田康資の攻撃により落城し、再び北条氏の手に移った。この際、北条氏が忍を使って葛西城を乗っ取るように命じていることが史料から確認できる。

足利晴氏と妻の芳春院、梅千代王丸の親子は、早ければ天文19(1550)年、遅くとも天文20(1551)年頃には葛西城に御座していたと考えられる。この古河からの公方の移座は、北条氏による古河公方権力の取り込みと抑制を目的としており、北条氏の意向が強く反映されていたと推測される。

天文23(1554)年、晴氏は葛西城を脱出して古河城へ立て籠もり、再び北条氏への敵対行動に出たが、すぐに鎮圧され、晴氏は幽閉され政治生命を絶たれた。

こうして、足利晴氏勢力の騒動も落ち着いた弘治元(1555)年、梅千代王丸が13歳の時に元服の儀式が葛西城で執り行われた。梅千代王丸は、13代將軍の足利義輝から「義」の字を与えられ、「義氏」と名乗ることになった。北条氏康はこの元服の儀式に臨席して、北条氏の血を受け継ぐ公方の誕生を祝った。義氏は葛西城に御座したことから「葛西様」と呼ばれた。義氏の居城が葛西城とされたの



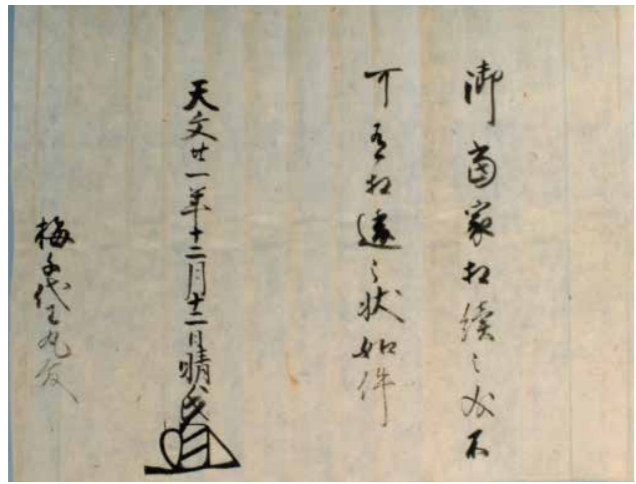
▲「義氏様御元服之次第」冒頭
元服の儀式に北条氏康が臨席していることがわかる。

◆古河公方と葛西城

小弓公方を滅亡させたことによって、北条氏綱は古河公方足利晴氏との関係をさらに強化した。天文8(1539)年には氏綱の娘の芳春院と晴氏との婚儀が執り行われた。これによって北条氏は「足利氏御一家」の格式を得て、古河公方家に次ぐ政治的地位を得た。その後、天文12(1543)年に晴氏と芳春院との間に梅千代王丸が誕生する。

しかし、北条氏と古河公方との関係は、天文15(1546)年に亀裂が生じてしまう。古河公方権力の復権を目論む足利晴氏は、山内・扇谷両上杉氏の要請を受けて関東管領上杉憲政の河越城攻めに参加して北条氏と敵対した。河越合戦は北条氏が勝利したため、晴氏の政治的立場は弱まり、北条氏の干渉を受ける結果となった。

晴氏は芳春院と婚姻する以前に、家臣の築田高助の娘との間に藤氏と藤政の2子をもうけており、本来ならば長子の藤氏が古河公方を継ぐはずであった。しかし、晴氏は天文21(1552)年、北条氏によって梅千代王丸への家督移譲と自身の隠居を強いられた。



▲「足利晴氏判物」(天文21〔1552〕年12月12日付)
(喜連川文書)
足利晴氏が梅千代王丸に家督継承する旨をしたための文書。晴氏の花押が見える。



▲北条氏の勢力図
2代氏綱の時に江戸城や葛西城といった東京湾沿岸地域に進出し、3代氏康以降に関東地方内陸部へと勢力を伸ばしていった様子がわかる。

だが、永禄7(1564)年に葛西城攻略の功績があった太田康資が、北条方から離反すると、安房国の里見義弘が下総国に侵攻してきた。北条氏康は里見義弘と太日川(現江戸川)を挟んで、再び戦火を交えた(第2次国府台合戦)。この戦いに氏康は勝利し、さらに天正2(1574)年、北条氏は葛西地域の上流に位置する関宿城を攻略して、利根川水系の河口部の葛西城周辺から中流部にある関宿城周辺までの交通を直接掌握すること

に成功した。
◇北条氏の滅亡と葛西城の終焉
北条氏が着々と関東を平定し領国を拡大していた頃、織田信長は室町幕府を滅ぼして天下統一を進めていたが、本能寺の変によって討たれた。その後、信長の後継者となった豊臣秀吉によって天下統一が引き続き進められていった。四国・九州を制圧した秀吉は、未だ従う姿勢を見せない北条氏を討つため、天

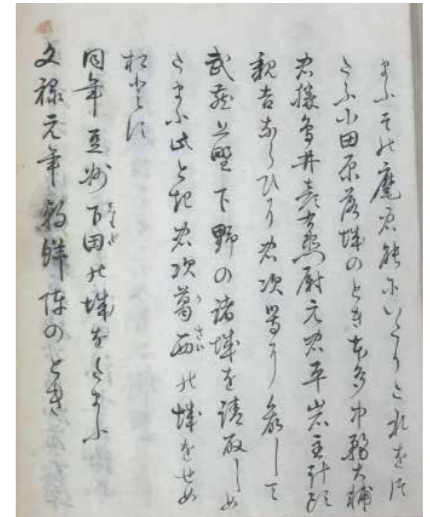
正18(1590)年、小田原へ進撃を開始した。

これを迎え撃った北条氏政・氏直父子は、小田原城をはじめとする複数の城で籠城する作戦で対抗したが、次々に落城・開城させられた。

このような中で、葛西地域の村々では、戦禍を避けるために豊臣軍と交渉を行い、軍勢の乱入による村内での略奪や放火を防ごうとした。一方で、葛西地域の村々が秀吉の庇護を請うなか、葛西城だけは抵抗を続けていたとされる。秀吉の軍勢にいた徳川家康の家臣戸田忠次の家伝によれば、江戸城をはじめとする周辺の北条氏の城が開城して降伏する中、葛西城は降伏しなかったため攻め落とされたことと記されている。こうして戦乱の時代に幾多の攻防が繰り返された葛西城は、北条氏の滅亡により終焉を迎えた。



▲小田原攻め豊臣軍進攻図



▲「戸田家伝」戸田忠次部分(『寛政諸家系図伝』)
小田原攻めの時に戸田忠次が本多忠勝ら家康の重臣とともに、「武蔵・上野・下野」の城を攻め、葛西城を攻略したことが書かれている。「上野・下野」は「上総・下総」の間違いだと考えられる。

特集1 中世の葛飾の暮らしと交通

中世の葛飾の暮らしと景観

葛西地域は、古利根川や太日川（現江戸川）・古隅田川の河川に囲まれた低地であり、南側は東京湾の海岸線に面していた。

この河川と海に囲まれた中世の葛飾では、微高地に村落を形成し、畠地や周辺の低湿地の水田で農耕を、臨海部では漁労を営んで生活していた。14世紀に成立した源義経の一代記である『義経記』には、今井（江戸川区）や亀無（葛飾区亀有）、牛嶋（墨田区）などから数千艘もの「海人の釣舟」を調達して隅田川へ船橋を架ける場面があり、葛西地域で舟を使用した漁労が行われていたことがうかがえる。また、『吾妻鏡』には源頼家の相模川遊覧のお供として葛西清重が従っているが、随行した清重について、「鵜を愛するの輩」として選ばれたことが記されている。清重が葛西地域で鵜飼に励んでいた可能

性がある。

室町時代の連歌師であった宗長の旅行記である『東路のつと』には中世葛飾の景観や暮らしの一端が記されている。それによると、葛西庄は芦が広がる中に人が住む里があり、炭や薪が少ないため芦を燃料として使っているとある。漁労活動が盛んで芦が生い茂るという中世葛飾の景観は、古代の葛飾の暮らしと景観から引き続くものであったとみられる。

中世の葛飾の治水と災害

『東路のつと』の中で宗長は、葛西地域を市川と隅田川の間であり、四方を堤に囲まれた地域としている。葛西地域の堤については、北条氏が配下の武將に葛西堤の築造を命じている史料があることから、戦国時代の葛西地域では堤が造られ、維持管理が行われていたことがわかる。葛西地域の上流部である武蔵

国太田荘や下総国下河辺荘では、鎌倉時代から低地や荒地の開発にともなう堤防の築造や修理が行われており、葛西地域でも鎌倉時代から堤防を築き、低地の開発が行われていた可能性がある。『吾妻鏡』の文治5（1189）年2月30日条に、源頼朝が安房・上総・下総の地頭に対して荒野の開発を命じていることから、鎌倉時代に葛西地域の開発が葛西氏主導で進められたと考えられる。

このように、葛西地域では堤防が造られ河川管理が行われていた一方、たびたび水害に見舞われた。『吾妻鏡』によると、建仁元（1201）年8月に葛西地域の浜辺の家々が高潮によって壊れ多くの方が被害に遭っている。また、康永2（1343）年の「妙円神税等送状写」には、葛西御厨内でこの年に早魃が発生するとともに、洪水があって、伊勢神宮への納税や納品が滞っている様子が記されている。この史料には「度々の洪水」と書かれており、葛西御厨内がしばしば洪水に見舞われていたことがわかる。

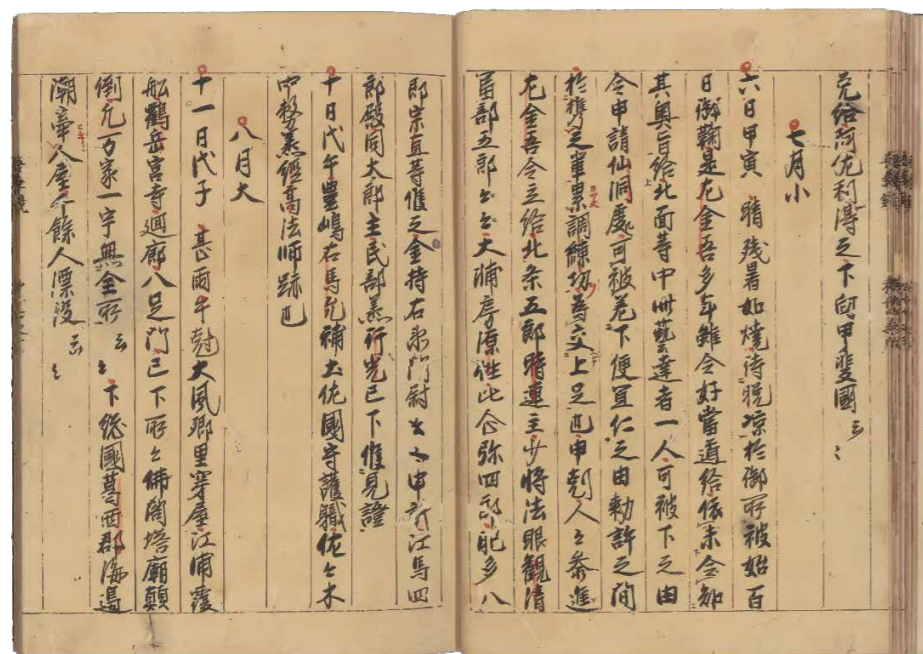
河川交通との関わり

葛西地域は古利根川水系の下流にあたり、海と内陸を結ぶ関東の玄関口として水上交通の重要な位置にあったため、船による往来が盛んであった。現在の葛飾区には「青戸」や「奥戸」など「戸」のつく地名があるが、「戸」は「津」を意味する言葉であることから、葛飾区域には河川に設けられた港である「津」が存在していたことがわかる。これらの「津」は河川交通と陸上交通とを結ぶ交通の要であった。東京低地に「津」が多いのは、東京湾とつながる河川を利用した水運によって、荘園からの年貢の輸送や各地との連絡のため

に整備されたものと推測される。

河川には関所である河関が置かれ、古利根川筋には猿俣関（葛飾区水元）、その上流部に大塚関（埼玉県八潮市）・戸崎関（埼玉県三郷市）などが、太日川筋には行徳関（千葉県市川市）・長嶋関（江戸川区）があり、14世紀半ばから15世紀前半にかけて下総国一宮の香取社（香取神宮）が管理をしていた。これらの河関は、下総国の内陸と江戸内海を船で渡る際に必ず通過しなければならない場所に設置され、船の往来を監視することができた。応永26（1419）年の「足利持氏御判御教書」に彦名関（埼玉県三郷市）が鎌倉の鶴岡八幡宮によって管理されていることが確認できる。また、応永33（1426）年に葛西地域の領主であった奥津家定が浄光寺の別当職と寺領を鶴岡八幡宮に関係する寺へ寄進するなど、室町時代になると葛西地域と鎌倉の鶴岡八幡宮との関係が深くなる。この背景には、鎌倉府の直轄領の形成と関係があったと考えられている。鎌倉府は関所における収入を意図的に鶴岡八幡宮などの社寺に寄進していることから、鎌倉の社寺による関所への関与は、鎌倉府の意向を受けたものとみられる。古利根川水系の上・中流部には鎌倉府直轄領が形成され、それらの直轄領と鎌倉の連絡を確保する目的で、鎌倉府が葛西地域の河川交通の掌握を図ったと考えられる。

北条氏の支配下にあった16世紀半ばの葛西地域は、江戸城を拠点とした江戸衆によって支配されていた。北条氏も葛西地域における河川交通を管理しようとしており、天正4（1576）年に北条氏照が佐倉・関宿・栗橋とともに葛西での船の交通を認めている。佐倉は下総内陸地域への河川交通の拠点、関



▲『吾妻鏡』（建仁元〔1201〕年8月11日条）
下総国の葛西地域の海辺で潮が引き、多くの人家が漂没したとある。

宿と栗橋は房総や関東地方内陸部への交通の拠点であり、それらの地域と河川によって結ばれ、東京湾に近い河口部の葛西の河川交通をあわせて管理することで、北条氏が関東地方南部と内陸部の間の水運を掌握していたことがわかる。

陸上交通と葛西新宿の整備

16世紀半ばには、北条氏が上杉氏から葛西城を奪い取った後、葛西城を改修するとともに、古利根川を挟んだ対岸に宿場である葛西新宿を整備した。葛西新宿が史料に現れるのは永禄11(1568)年が最初であるが、その頃にはすでに整備されていたとみられる。天正10(1582)年の伝馬手形には、江戸から浅草・葛西新宿・白井(千葉県佐倉市)

までの交通が記されており、小田原から江戸を經由して下総の内陸部へと結ぶ北条氏の陸上交通拠点の1つとして葛西新宿が機能していたことがわかる。

また葛西新宿は、東西に街道、南北に河川が走って交差しており、陸上交通と河川交通の交わる交通拠点でもあった。北条氏に関する史料の中に、葛西と浅草に船橋を架けることを命じたものがある。船橋は葛西城と葛西新宿の間を流れる古利根川に架けられ、普段は陸上交通と渡河の便を図り、戦時には船橋を撤去して交通を断つつもりであったと考えられる。

中世の葛飾と他地域との交流

ここまでみてきたように、中世の葛飾区域



▲葛西城・葛西新宿位置図

葛西城と葛西新宿の間にある古利根川には、舟をつないでつくった船橋がかかっていたと考えられている。

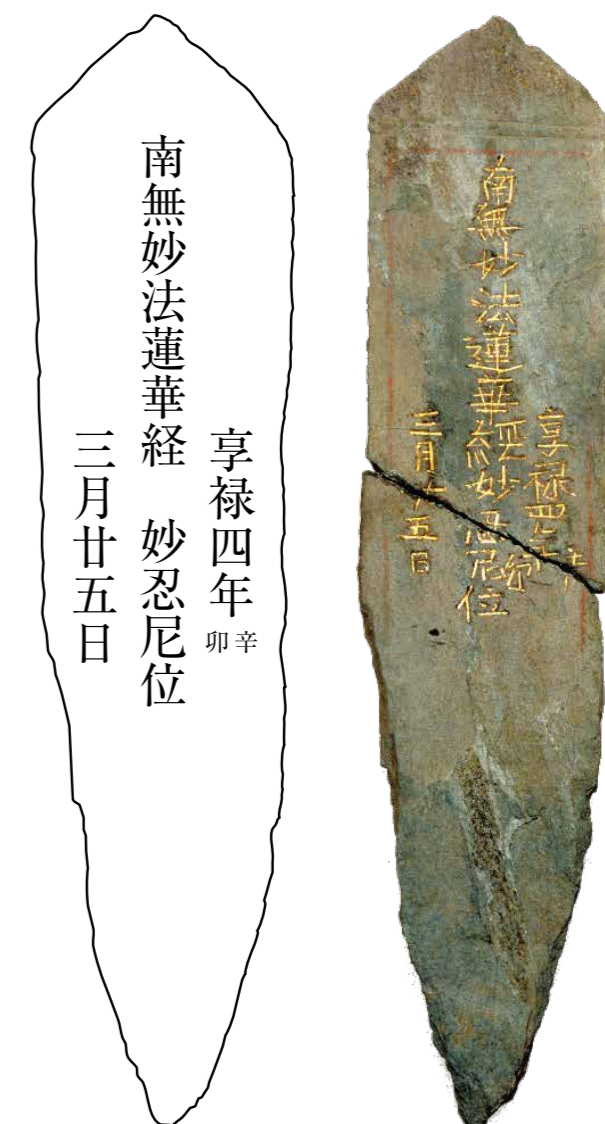
は河川を利用した水上交通と陸上交通の結節点であり、各地から人や様々なモノが集まってきた。

奥戸の鬼塚遺跡から見つかった土器の中に、南伊勢系土鍋と呼ばれる鎌倉時代の素焼きの土鍋がある。現在の三重県である南伊勢地方で生産された南伊勢系土鍋は、関東地方では鎌倉を除いて大量に見つかるものではないが、葛飾区域を含む東京湾沿岸部や東京湾と河川でつながる内陸部の一部で出土事例があり、海上交通と河川交通を利用した東海地方と関東地方との交流をものがたる。この土鍋がどのような目的で葛飾区域にもたらされたのかについては、商品、何らかの儀式に使用した非日常的な道具として持ち込まれたとする考え方があるが、詳細は不明である。いずれにしても、南伊勢系土鍋が葛飾区域で出土したということは、南伊勢地域と葛飾区域を含む中世の関東地方との人とモノの交流が行われていたことを意味する。葛飾の地には伊勢神宮の荘園であった葛西御厨があったことから、伊勢からの人とモノの移動があった可能性が高い。

葛西城の井戸の石組には、宝篋印塔の台座、五輪塔の一部や板碑が転用されており、井戸を廃棄する際に大量の瓦を詰め込んで埋めていることから、周辺に寺院があったと推測されている。低地にある葛西城の周辺には、宝篋印塔や五輪塔に使用できるような大きな石が採れないため、他の地方から水運を使って運び込まれたと考えられる。また、板碑の原材料となった石も武蔵国秩父で産出する緑泥片岩であり、これも東京湾に流れ込む入間川の河川交通を利用して葛飾の地にもたらされたとみられる。



▲鬼塚遺跡出土の南伊勢系土鍋



▲葛西城出土の板碑

井戸が沈むのを防ぐために板碑を根石として利用していた。

特集2 出土遺物から見る葛西城

水が守った出土品

葛西城址では木製品などの有機物が数多く出土している。葛飾区は低地に立地するため、地下水の水位が高く、水分を含んだ土で遺物がパックされることで腐食が進まなかったためである。葛西城址に限らず葛飾区内の遺跡では木製品が出土することが多く、低地遺跡の特徴ともいえる。葛西城址で出土した木製品は漆器・下駄・櫛など様々である。

葛西城の出土遺物

多くの攻防が繰り返されてきた葛西城では、当時の遺物が出土している。

●武具：鏃・小柄・刀装具・鉛製の鉄砲玉などの武器や武具類が、主郭を囲む堀などから出土した。



▲武具類

●頭骨：主郭の堀から斬首された女性の頭骨がみつかった。



▲頭骨

▲復元された顔

●手づくねかわらけ：素焼きの土器であるかわらけは、足利晴氏や義氏が御座した時期に使われたものだと考えられる。



▲手づくねかわらけ

手づくねとは、回転台（ろくろ）を使わずに粘土をこねて皿の形にしたもの。北条氏の本拠地である小田原でつくられたかわらけが出土している。

●井戸：手づくねかわらけが出土した井戸は、石組みとともに結桶という短冊状の板を結んでつくった桶を井戸の枠として備えたものであった。



▲井戸の跡

●青花器台：主郭の土坑内から花瓶などをのせる台である中国元代（14世紀）の青花器台が出土している。中国からの伝世品の所有は、高貴な地位を象徴している。

▶中国元代の青花器台

中国産の高級陶磁器は、当時の武家の嗜好品であるとともに所有者の地位の象徴であった。



●茶臼：主郭の土坑内から茶葉をひくための道具である茶臼が出土している。

▶蓮弁を刻んだ茶臼

茶の湯に用いる抹茶をつくるために茶臼で茶葉をひいた。



●娯楽と嗜み：瀬戸・美濃焼の茶碗のほか、茶入れや茶壺などが出土しており、城内で茶の湯が嗜まれていたことがわかる。また、将棋の駒やサイコロも出土しており、これらを使っていた様子がわかる。



▲天目茶碗

堀から出土した瀬戸・美濃焼の天目茶碗（鉄釉をかけてつくられたもの）で、16世紀半ばのものである。城内で、茶の湯が嗜まれていたことがわかる。



▲将棋の駒

城内の暮らしがわかる出土遺物

●食生活：土鍋や鍋で調理された食べ物を食器に分ける木製の杓子などが出土している。また、瀬戸・美濃焼のすり鉢や常滑焼のこね鉢が出土していることから、穀物や魚肉を練ったりすったりして調理をしていたことがわかる。食器は、陶器や木器が使われていた。また、スズ

キ・タイなどの魚の骨やマガモ・キジなどの鳥の骨、ハマグリ・シジミ、米、粟、クルミ、モモなどといった食料になるものも出土している。



▲食に関する様々な出土品



▲漆碗

朱漆で鶴と亀が描かれた漆碗である。葛西城では多くの漆碗が出土している。